

記紀神話の死生観と自然観（二）

黒崎輝人

はじめに——「天地開闢」と「天地創造」——

前稿においては記紀神話に残されている生と死の物語を中心に、古代日本人の死生観の特徴を探った。本稿では、同じく自然観の特徴を考えていきたい。ここでも『旧約聖書』との比較から始めよう。

一、『旧約聖書』の「天地創造」

初めに、神は天地を創造された。地は混沌であつて、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。

「光あれ。」

こうして、光があつた。神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があつた。第一の日である。

第一日目に、最初に光が造られ、闇が分けられて、昼と夜が造られた。このあと、日ごとに世界が創られて行く。

第二日。この日は天が創造される。

神は言われた。

「水の中に大空あれ。水と水を分けよ。」

神は大空を造り、大空の下と大空の上に水を分けさせられた。そのようになつた。神は大空を天と呼ばれた。夕べがあり、朝があつた。第二の日である。

ここから先は、それぞれの神の言葉と、創られたものを並べておこう。

第三日。地と海が造られた。

「天の下の水は一つ所に集まれ。乾いた所が現われよ。」

同日。草と木。

「地は草を芽生えさせよ。種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける果樹を、地に芽生えさせよ。」

第四日。太陽と月、星。

「天の大空に光る物があつて、昼と夜を分け、季節のしるし、日や年のしるしとなれ。天の大空に光る物があつて、地を照らせ。」

第五日。水と空の生き物。

「生き物が水の中に群がれ。鳥は地の上、天の大空の面を飛べ。」

「産めよ、増えよ、海の水に満ちよ。鳥は地の上に増えよ。」

第六日。地の生き物。

「地は、それぞれの生き物を産み出せ。家畜、這うもの、地の獣をそれぞれに産み出せ。」

そして最後に水と空と地とすべての生き物を「支配させよう」として、「御自分にかたどって」人を創造する。

第七日、神は「天地創造」を終えて休息する。

天地万物は完成された。第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、安息なさった。この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なさったので、第七の日を神は祝福し、聖別された。

これが天地創造の由来である。

こうして世界は「完成」され、それ以来不変のものとしてあり続けている、とされる。

人の創造に付いては前稿で論じたので、本稿では触れない。本稿では、それ以前の部分を比較検討の対象とする。

『旧約聖書』の記述をそのまま追っていくと、神はどこにいたのか、光と太陽、昼と夜の関係はどうなっているのか、曖昧とも取れる記述になっている。

またこのあとの「創世記2・4・5」では、

主なる神が地と天を造られたとき、地上にはまだ野の木も、野の草も生えていなかった。主なる神が地上に雨をお送りにならなかった

からである。

とあって、第三日の記述とは微妙なずれがある。

しかし、記紀神話との比較を念頭に『旧約聖書』の「天地創造」の特徴を考えると、当然ではあるが、前稿で論じた人間の、生命の起源と同じ特徴があげられる。

神が、その言葉によって、天地と宇宙を産みだし、植物を造り、動物を造り、最後にそれらのいのちの支配者として人間を造った、と。そしてまた、神によって造られたこの世界は「完成」しており、不変のものとしてあること、も特徴にあげられる。

二、『日本書紀』の「天地開闢」

まとめて記紀神話と呼ばれる『古事記』と『日本書紀』の神々の物語であるが、この世界がどのようにして始まったか、その冒頭部分に付いては『古事記』の物語は、『日本書紀』に伝えられるいくつかの異伝のバリエーションのひとつと見ることが出来る。以下、本稿では『日本書紀』を中心に考察して行く。

なおあらかじめ言っておけば、神とこの世界との関わり方において、「天地創造」と「天地開闢」はまったく異なることを確認することになるだろう。

(一)『日本書紀』冒頭本文の「天地開闢」

『日本書紀』全体の冒頭であり、編者たちによって十分に練られたはずの文章であるが、そこには構文上の、あるいは発想上のといつてもよいひとつの特徴が見出される。それは、すでに指摘されていることであるが、まず最初に中国古典からの引用によって「普遍的真理」

を述べ、「故(かれ)曰はく」つまり「それ故に、次のように言う」という一文でつないで、日本の固有の伝承内容を語る、という構文上の特徴である。

『淮南子』や、いまは散逸してしまった『三五曆記』などからの引用で成り立つ冒頭部分をまず引用しておこう。

古(いにし)へ天地(あめつち)未だ剖(わか)れず、陰陽(めを)分(わか)れざりしとき、混沌(まろか)れたること鶏子(とりのこ)の如(ごと)くして、溟滓(ほのか)にして、牙(きざし)を舍(ふ)り。其れ清陽(すみあきらか)なるものは、薄靡(たなび)きて天(あめ)と為り、重濁(おもくにご)れるものは、淹滞(つつ)ゐて地(つち)と為るに及びて、精妙(くはしくたへ)なるが合(あ)へるは搏(むらがり)り易(やす)く、重濁(おもくにご)れるが凝(こ)りたるは竭(かたまり)り難(がた)し。故(かれ)、天(あめ)先(ま)ず成りて地(つち)後(のち)に定(さだま)る。然(しかう)して後に、神聖(かみ)、其の中に生(あ)れます。

原初の、「天地未剖、陰陽不分」の、鳥の卵のような形容される「混沌」がまず語られる。そこから「清陽」と「重濁」の違いによって天地が分かれていく。というのである。要するに、原初の混沌から、陰陽の原理によって天地が分かれ、天が先にできた、と語られている。これが天地の始まりに付いての普遍的真理と考えられていて、だから(日本でも)次のように言う、と続いていく。「日本でも」と補うと文脈が明確になる。

その日本の固有の伝承と考えられる部分は、

開闢(あめつちひらく)る初(はじめ)に、洲壤(くにつち)の浮かれ漂へること、譬(たと)へば游魚(あそぶい)の水上に浮けるがごとし。時に天地の中に一物(ひとつのもの)生れり。状(かたち)、葦牙(あしかび)のごとし。便(すなは)ち神となる。国常立尊(くにのとこたちのみこと)と号(まう)す。(略凡(すべ)て三(みは)しらの神ます。乾道(あめのみち)独(ひとり)化(な)す。所以(このゆゑ)に、此(こ)の純男(をとこのかぎり)を成せり。

一読して明らかなのは、天地が分かれるという事実のみが語られて、それが陰陽の原理によるとは語られていないことである。「乾道」や「純男」という表現からすると、ここまでは陰陽以前と解釈するほうがむしろ自然であろう。日本の固有の伝承と中国的な陰陽の原理による天地の始まりとは微妙にずれているのである。それにもかかわらず、陰陽原理で解釈される、ないしは裏付けられる、という構造になっている。

後述するように、書紀編者は、伊弉諾尊と伊弉冉尊のいわゆる国生み神話に陰陽の原理を見出しているのだが、『日本書紀』本文の記述に従えば、天地が陰陽の原理で分かれて行くという概念はなかった、少なくとも極めて希薄であったと言えそうである。

『日本書紀』は天地の始めに付いて、本文の他に六つの異伝を伝えている。それぞれ、原初の状態がどう表現されているか、確認しておこう。

- | | |
|------|------|
| 書紀本文 | 開闢之初 |
| 一書第一 | 天地初判 |
| 一書第二 | 国稚地稚 |

- 一書第三 天地混成
- 一書第四 天地初判
- 一書第五 天地未成
- 一書第六 天地初判

「天地初判」という四字熟語で表現される例が最も多い。しかし一方、一書の第二・第三・第五のように、分かれる以前の状態で重点をおいた表現も見られる。本文を含め「天地初判」をいう場合でも、むしろ原初の混沌そのものの中から最初の神が現われることに重点がおかれた表現になっている。「天地初判」と言いながら、どこまで「判」が意識されていたか疑問であって、単に「この世のはじめに」くらいの意味しかなかったのではないかと考えられる。

少なくとも、天と地が分かれて行くこと自体に対しては関心が希薄である、ということを確認できるだろう。

このように中国的な天地の始まりとは微妙な差異があるのだが、他方、『旧約聖書』の「天地創造」との違いもまた明白で、『旧約聖書』ではまず神とその言葉があったのに対して、『日本書紀』ではまず「天地」があり、その中から神が生まれてくる。

（二）「神世七代」―最初の神々―

どのような神々が最初に生まれたのか。『日本書紀』では、七といふ奇数でくくり、「神世七代」と呼ぶ神々とされる。ちなみに『古事記』では、「別天神」五柱プラス「神世七代」の計十二代の神々とされ、『日本書紀』とは異なる括り方をしている。しかしその神々は『日本書紀』の神々と共通しており、括り方が違うだけである。本稿の視点からは『日本書紀』のみを分析対象として論を進めることができる。

その『日本書紀』の七代であるが、七代はさらに三代と四代に分けられる。まず、最初の三代から見えていく。

本文は先に引用したので、次に六つの一書を並べておこう。ただし煩雑さを避けるため、第二の神以下は基本的に省略して、最初の神に注目する形で引用する。

（1）一書第一

天地（あめつち）初（はじめ）て判（わか）るととき、一物（ひと）つものもの、虚中（そらのなか）に在（あ）り。状貌（かたち）言ひ難（がた）し。其の中に自（おの）づからに化生（なりい）づる神（かみ）有（いま）す。国常立尊（くにのとこたちのみこと）と号（ま）うす。（以下略）

（2）一書第二

古（いにしへ）国（くに）稚（い）しく地（つち）稚（い）しき時に、譬（たと）へば浮膏（うかべるあぶら）の猶（ごと）くして漂蕩（ただよ）へり。時に、国の中に物（もの）生（な）れり。状（かたち）葦牙（あしかび）の抽（ぬ）け出（い）でたるが如（ごと）し。此（これ）に因（よ）りて化生（なりい）づる神（かみ）有（ま）す。可美葦牙彦男尊（うましあしかびこちのみこと）と号（ま）うす。

（3）一書第三

天地（あめつち）混（まろか）れ成る時に、始めて神人（かみ）有（ま）す。可美葦牙彦男尊（うましあしかびこちのみこと）と号（ま）うす。（以下略）

（4）一書第四

天地（あめつち）初（はじめ）めて判（わか）るとときに、始めて俱（とも）に生（なりい）づる神有（す）。国常立尊（くにのとこたちのみこと）と号（ま）うす。次に国狭槌尊（くにのさつちのみこと）。

又(また)曰(い)はく、高天原(たかまのはら)に所生(あ)れ
ます神の名(みな)を、天御中主尊(あめのみなかぬしのみこと)
と曰(まう)す。次に高皇産霊尊(たかみむすひのみこと)、次に
神皇産霊尊(かみみむすひのみこと)。(以下訓注略)

(5) 一書第五

天地未(いま)だ生(な)らざる時に、譬(たと)へば海上(うなはらのう
へ)に浮(うか)べる雲の、根(ね)係(かか)る所(ところ)無
きが猶(ごと)し。其の中に一物(ひとつのもの)生(な)れり。
葦牙(あしかび)の初めて渥(ひぢ)の中に生(おひい)でたるが
如(ごと)し。便(すなは)ち人(かみ)と化(な)る。国常立尊と号(な)す。

(6) 一書第六

天地(あめつち)初(はじめ)て判(わか)るとときに、物(もの)
あり。葦牙(あしかび)の若(ごと)くして、空(そら)の中に生
(な)れり。此に因りて化(な)る神を、天常立尊(あめのとこた
ちのみこと)と号(な)す。次に可美葦牙彦男尊。又物有り。浮膏(うか
べるあぶら)の若くして、空の中に生れり。此に因りて化(な)る
神を、国常立尊(くにのとこたちのみこと)と号(な)す。

まず本文から一書第六まで、登場する神々を列挙してみよう。

書紀本文 国常立尊・国狭槌尊・豊斟淳尊

一書第一 国常(底)立尊・国狭(立)槌尊・豊国主尊(別名略)

一書第二 可美葦牙彦男尊・国常立尊・国狭槌尊

一書第三 可美葦牙彦男尊・国常立尊

一書第四 国常立尊・国狭槌尊

又曰、天御中主尊・高皇産霊尊・神皇産霊尊

一書第五 国常立尊

一書第六 天常立尊・可美葦牙彦男尊・国常立尊

神名についてまず簡単に説明しておこう。

常(とこ)は床(とこ)でもあるとされる。底(そこ)と同様に、
いわば土台である。国の土台である神、という意味に成る。その永遠
性が意識されると「常」という字が使われるのであろう。まとめてク
ニノトコタチと呼んでおこう。

また「可美」(うまし)というのは「大」や「速」などと同様に称
辞であるから、神の名前を解釈するときには除いておくことができる。
「彦男」はヒコもチも男性を示す。葦の芽を神格化した男性神である。
アシカビヒコヂと呼んでおこう。

この神は大坂湾の自然を背景に生まれたと考えられている。大坂湾
の葦原が秋の洪水で泥の海と化す。ところが春になるとそこから新し
い生命が芽吹いてくる。そのイメージに世界の始まりが重ねられたの
だろう、と。

アシカビヒコヂは、クニノトコタチが視覚的というよりは言葉に頼
った意味を持つのに対して、具体的な視覚的イメージを伴っている。
単純明快にアシカビヒコヂの方がより古い、と考えてよいのだろう。
先述の本文の他に、一書第五が、国常立尊を「葦牙(あしかび)の初
めて渥(ひぢ)の中に生(おひい)でたるが如し」と形容しているの
も、両神名の融合と移行を示すものと考えられる。

異質なのは、一書第四に「又曰」として引用されている天御中主尊、
高皇産霊尊、神皇産霊尊の組み合わせである。これは『古事記』の「別
天神」の最初の神々でもある。

特に天御中主尊は、実際にいずれかの場所で祭られた形跡が無いこ
ともあって、中国唐王朝の主祭神である昊天上帝に倣って文字通りに
創作された神ではないかとされる。そのとおりであろう。

高皇産靈尊（たかみむすひのみこと）と神皇産靈尊（かみみむすひのみこと）はムスヒ、すなわち物を産み出す力の神格化されたもので、男女の対とされた神と考えられる。とくにタカミムスビはいわゆる天孫降臨の一方の主宰神である。この神に付いてはあらためて別稿を用意することとし、ここでは、アメノミナカヌシとセツトになっていることから、天地の始まりの最初の神としては最も新しく登場したのだからと判断しておきたい。

かくして、記紀神話の異伝の比較から、具象的な神から抽象的な神へと最初の神が移行していることが判明する。しかも、三者が混在することと、最も新しいと推定されるアメノミナカヌシは『古事記』編纂から十余年を経た『日本書紀』においても物語を持たない、名だけの存在であり、古代においては定着しないままに次の時代へと持ち越されることから、この移行が記紀編纂の同時代に進行したことが予想されるのである。

(三) 次の四代 —— 男女対偶の神々 ——

四代 湍土煮尊（ウヒヂニノミコト）・沙土煮尊（スヒヂニノミコト）

五代 大戸之道尊（オホトノヂノミコト）・大苦辺尊（オホトマベノミコト）

六代 面足尊（オモダルノミコト）・惶根尊（カシコネノミコト）

七代 伊弉諾尊（イザナキノミコト）・伊弉冉尊（イザナミノミコト）

四代目の両神、ウとスが対になって男女を示すとされる。「ひぢ」も「に」も泥や土をあらわす。ここでもまた泥が登場する。泥の中から男女つがいの神が現われる。

五代目、「と」は二つの世界をつなぐ狭まった所をいう。港（みなと）や瀬戸（せと）の「と」である。そこを塞ぐ扉ではなく、隙間の空間そのものを指す。ここでは男女の性器を指すとされる。「みとのまぐはひ」の「と」でもある。それに「大」、すなわち「立派な」という修飾語が付いている。

六代目、ここから男女両神のかけあいの言葉になる。男神が言う。「面（おも）」が「足（た）」りている、容貌が整っている、きれいだね、と。女神が答える。「惶（かしこ）」いことです、おそれおおいことです、と。

七代目、「いざ」は現代語に残る「いざ鎌倉」の「いざ」、「さあ」という誘いの言葉である。「な」は現代語の格助詞の「の」、「き」と「み」はそれぞれ男と女を示す。「さあのおとこ」「さあのおんな」というのが直訳である。

この部分、物語仕立てになっている。なんらかの神話劇的なものが背景にあるのか、それともまったくの文学的創作なのか、付加された二つの一書、すなわち異伝もイザナキとイザナミの系譜にかかわる短い物で、手がかりに乏しい。

『日本書紀』の編者は、この四代を、

乾坤の道相參（あひまじ）りて、化（な）る。所以（このゆゑ）に、此の男女（をとこをみな）を成す。

と位置づける。陰陽が交わって男女の神々が生まれた、と。

陰陽の原理と言うよりは、生々しく性的であるが、それは後述しよう。

三、イザナキとイザナミの「大八洲生成」

—— いわゆる国生み神話 ——

ここでは『書紀』本文によって物語を確認しておく。
最初に「礮馭廬嶋（おのごろしま）」が造られる。

伊弉諾尊・伊弉冉尊、天浮橋（あめのうきはし）に立たして共に計（はか）らひて曰（のたまは）く「底（そこ）つ下に豈（あ）に国（くに）無（な）けむや」とのたまひて、すなはち天之瓊矛（あめのぬぼこ）をもて、指（さ）し下ろして探（かきさぐ）る。ここに滄溟（あをうなはら）を獲（え）き。其の矛（ほこ）の鋒（さき）より滴瀝（しただ）る潮（しほ）、凝（こ）りてひとつの嶋に成（な）れり。名づけて礮馭廬嶋（おのごろしま）という。

天浮橋は水平方向の橋ではなく、天と地を結ぶ垂直方向の梯子だとされる。「あに国無けむや」は「いや必ずある」という反語であり、神の言葉として予言的に実現することが前提されている。「おのごろしま」は、おのずからに凝り固まった島、という意味である。この矛でかき回してという描写自体、性行為を連想させるとされている。

イザナキとイザナミはオノゴロシマに降り立ち、「みとのまぐはひ」して「くにつち」を産もうとする。そこで柱を巡って求婚するのだが、女神のイザナミが先に声をかけてしまう。

二神、ここに、その嶋に降り居して、よりて共為夫婦（みとのまぐはひ）して、洲国（くにつち）を産生（う）まんとす。すなはち礮馭廬嶋をもて、国中（くになか）の柱として、陽神（をかみ）は左よりめぐり、陰神（めかみ）は右よりめぐる。

（中略）

時に、陰神先ず唱へて曰く「熹哉（あなうれしゑや）、可美少男（うましをとこ）に遇ひぬること」とのたまふ。陽神悦びずして曰く「吾はこれ男子（ますらを）なり。理（ことわり）まさに先に唱ふべし。如何ぞ、婦人（たわやめ）にして、かへりて言（こと）先立つや。事すでに不祥（さがな）し。以て改め旋るべし」とのたまふ。

ここでは陰陽の原理を受容することは、男尊女卑の差別思想をも受け入れることだったことだけを確認しておく。

よりて陰神に問ひて曰く「汝（いまし）が身に何の成れるところか有る」とのたまふ。こたへて曰く「吾が身にひとつの雌の元（めのはじめ）というところあり」とのたまふ。

陽神曰く「吾が身に亦、雄の元といふところあり。我が身の元のところをもて、汝が身の元のところ合（あは）せむと思欲ふ」とのたまふ。ここに陰陽（めを）始めて遵合（みとのまぐはひ）して夫婦（をうとめ）となる。

解説するまでも無いだろう。この部分は『古事記』の方が知られているかもしれない。『古事記』からも引用しておく。

ここに、其の妹（いも）伊邪那美命に問ひて曰（の）らさく「汝（な）が身はいかに成れる。」とのらせば、答へて白（まを）さく、「吾（あ）が身は成りなりて成り合はぬ処（ところ）一処（ひとつところ）在（あ）り。」とまをす。しかして、伊邪那岐命詔（の）らさく、「我（あ）が身は成りなりて成り余れる処一処在り。故、此の吾が身の成り余れる処以ちて、汝が身の成り合はぬ処に刺し塞ぎて、国土（くに）

を生み成さむと以為(おも)ふ。生むこと奈何(いか)に。」との
らせば、(下略)

こうして国生みが始まるのだが、最初の「淡路洲(あはぢのしま)」
は「意(みこころ)に快(よろこ)びざるところなり」とされる。本
文ではこれ以上の言及が無い。この点、「大八洲」を見た後でもう一
度検討しておこう。

「大八洲」については『日本書紀』本文に従って、名前だけ並べて
おく。

- (1) 大日本豊秋津洲(おほやまととよあきづしま)
- (2) 伊予二名洲(いよのふたなしま)
- (3) 筑紫洲(つくしのしま)
- (4) 億岐洲(おきのしま)
- (5) 佐渡洲(さどのしま)
- (6) 越洲(こしのしま)
- (7) 大洲(おほしま)
- (8) 吉備子洲(きびのこしま)

(これ以外の、対馬、壱岐、及び処処の小嶋は、イザナキ・イ
ザナミの産んだものではなく、「潮の沫」の凝り固まったもの
だという。)

この「大八洲」のうち、(4)の億岐洲と(5)の佐渡洲は「雙(ふたご)」
とされ、「世人(よひと)、あるひは雙生むことあるは、此にかたどり
てなり」と双子が生まれることの起源神話となっている。

また、「越」が「洲」とされている理由は未詳である。「しま」とは、
水に囲まれた陸地だけではなく、陸上でも「占む」、「閉む」、「治る」

などの語で表されるような状態になっている場所をいう。従って「く
に」ではなく「しま」が使われても必ずしもおかしくはないのだが、
なぜ「越」だけが「しま」なのか、手がかりはないに等しい。

(7)の「大洲」も余りに一般的な名で、瀬戸内のいくつかの島が候補
に上がるようだが、どの島を指すのか未詳とされる。

「大八洲」として八つの島をあげるが、具体的にどの島か、実は明
確ではないのである。先述の、「快びざるところ」とされた「淡路洲」
も、曖昧さが残る。この部分もいくつかの「一書」があり、島の名前
などの異伝が残されているのだが、例えば、一書第一では女神が先に
声をかけた結果として、「蛭児(ひるこ)」とともに「淡洲(あはのし
ま)」が「児(こ)の数(かず)に充(い)れず。」とされている。最
初に不具の子が生まれるという神話類型に属するという。この「淡洲」
が先の「淡路洲」と同一かとも考えられるが、一書第一は「淡洲」と
は別に「淡路洲」があつて、それは「大八洲」にはいっている。

具体的な八島を示すのは本文と一書第一のみで、他の異伝は、具体
的な八にはこだわっていないように見える。

偶数の「八」は日本固有の「聖数」とされる。具体的な数字の八で
はなく、「多くの」の意味で使われることも多い。あるいは「大八洲」
も本来そのような概念だったのではないか。それが、中国的な聖数で
ある奇数が受容されるのと表裏の関係で、具体的には八が求められてい
ったのではないだろうか。奇数の場合は七までは具体的な数であるこ
とがほとんどである。

ここまでの所をまとめておこう。

『日本書紀』編者は陰陽の原理によって解釈しようとしているが、
日本の領土の島々はイザナキとイザナミの生々しい性的行為によって
生み出されている。抽象的陰陽原理によってではない。

しかし一方では、先に引用した『古事記』と『日本書紀』の表現の

違いからも明らかのように、生々しい性的表現は忌避され、タブー化されつつあったことも推定できる。それは、原初のおおらかさの喪失とも言えるし、逆に、律令国家の形成にもなって野卑から雅びへと洗練されて行く過程とも言える。そのような両面性を持った事態が進行していた、ということである。

さて、「大八洲生成」はまだ完結していない。

次に海を生む。次に川を生む。次に山を生む。次に木の祖（おや）句句廻馳（くくのち）を生む。次に草の祖・草野姫（かやのひめ）を生む。亦（また）は野槌（のつち）と名（なづ）く。

日本を彩る地形と植物が生み出されて行く。動物は生み出されない。それは食物の起源とかかわって、次の世代で生み出されることになっている。

まとめにかえて

この後、『書紀』本文ではイザナキはイザナミに譲らつて、

「吾（われ）既（すで）にして大八洲国及び山川草木を生めり。何（い）かにぞ天下（あめのした）の王者（きみたるもの）を生まざらむ」とのたまふ。是（ここ）に、共に日の神を生みまつります。大日靈貴（おほひるめのむち）と号（ま）す。

として、次の主役となる「天下王者」をうむ。

付言すれば、本文ではイザナキとイザナミの性的行為によって「大日靈貴」すなわち天照大神以下の神々が生まれるが、一書第一では、

イザナキのみがイザナミなしで、手に持った鏡の力によって「大日靈尊（おほひるめのみこと）」以下の神々を生む。一書第六では、黄泉の国から帰ったあとのみそぎで、イザナキのみから、天照大神以下の神々が生まれる。

ここでも性的行為の忌避が進んでいる。

そして最後に火の神、軻遇突智（かぐつち）を産んで、イザナミは焼け死んでしまう。ここからあとは前稿で論じた。

本稿での検討の結果をもう一度まとめておこう。

日本の固有の伝承では、漂う混沌から最初の神が生まれる点に関心の重点があったようだ。中国の場合ほどには天地の剖判は意識されていないかったようである。

しかし『旧約聖書』の世界と比較すると違いは明白で、中国のものと日本の伝承とは共通性が認められる。それは、まず天地自然があり、その中から神が現われるということであり、宇宙の外にいても取れる神が言葉によって世界を創って行く物語とは構造がまったく違う。「天地創造」と「天地開闢」とは、神（々）と「天地」とのかかわり方がまったく異質なのである。

次に、日本とその自然はイザナキとイザナミの生々しい性的行為によって生み出された。抽象的な陰陽の原理によってではない。

中国の場合も、陰陽思想のそもそもの出発点は男女雌雄の性的行為からの類推であることが推定されるが、『日本書紀』編者の前にあった陰陽思想はそのような生々しさをほぼ消去した抽象度の高い原理としての陰陽思想であつたらしい。

そのような陰陽思想が、性的行為の忌避化や、男尊女卑の思想とともに受容されていったのである。

次稿においては、このようなものとしてあつたこの世界、一般に「葦原中国」と呼ばれる世界とつながる「異界」を見て行こうと思う。天

上世界である「高天原」、地下世界である「黄泉の国」、また「底つ国」、「根の国」、海上遙かな世界である「常世の国」など、それらはどのような世界で、この世界とどのように結ばれているのか、確認して行きたい。

（未完）

注

本稿は、2009年江戸川大学春期公開講座の内容をもとに活字化したものであり、本紀要前号からの続編である。本稿では自然観と宇宙観とを扱う予定でいたが、宇宙観は次稿にまわすことにした。

引用史料は、『日本書記』および『万葉集』は古典大系本を、『古事記』は思想体系本を、『旧約聖書』は新共同訳本を、それぞれ使用した。ただし、旧漢字を適宜新漢字に換え、動詞・副詞はかな標記に変更するなど、読みやすく手を加えたところがある。